

Ad 人類の幸福のために
Felicitatem
Humanam



久留米大学 附設高等学校 75 周年
久留米大学 附 設 中 学 校 55 周年

Ad 人類の幸福のために
Felicitatem
Humanam

2001 ▶ 2025

久留米大学 附設高等学校 75 周年
久留米大学 附 設 中 学 校 55 周年



久留米大学 附設中学校 久留米大学 附設高等学校



校舎西棟 〈2012(平成24)年落成〉



校歌碑



校舎西棟 (旧野中町校舎)



校舎東棟 〈2011(平成23)年落成〉



東棟中庭



特別教室棟 〈2025(令和7)年落成〉



特別教室棟



憩いの森

歴代の校長



初代校長
板垣 政参

1950年2月～1959年6月



二代校長
檜崎 広之助

1959年7月～1961年6月



三代校長
大内 覚之助

1961年7月～1965年3月



四代校長
原 巳冬

1965年6月～1979年3月



五代校長
世良 忠彦

1979年4月～1990年3月



六代校長
緒方 道彦

1990年4月～1993年3月



七代校長
鹿毛 勲臣

1993年4月～1998年3月



八代校長
樋口 忠治

1998年4月～2007年3月



九代校長
古田 智信

2007年4月～2008年3月



十代校長
吉川 敦

2008年4月～2017年3月



十一代校長
町田 健

2017年4月～現在

歴代の理事長



初代理事長
溝口 喜六

1928年2月～1945年4月



二代理事長
本間 一郎

1945年4月～1948年3月



五代理事長
根城 晝夜

1970年6月～1980年8月



六代理事長
猪口 嘉二

1981年6月～1982年10月



九代理事長
布施 玄

1993年6月～1996年6月



十代理事長
三島 重人

1996年6月～2005年6月



十三代理事長
神代 正道

2011年7月～2016年12月



十四代理事長
永田 見生

2017年1月～現在

歴代の学長



三代理事長

小野寺 直助

1948年3月～1951年3月



四代理事長

石橋 正二郎

1951年3月～1969年6月



初代学長

小野寺 直助

1947年11月～1952年12月



二代学長

谷口 弥三郎

1953年1月～1963年8月



三代学長

古賀 良彦

1964年4月～1967年6月



七代理事長

吉久 勝美

1983年4月～1990年6月



八代理事長

徳永 徳次郎

1990年6月～1993年6月



四代学長

遠城寺 宗徳

1968年1月～1971年12月



五代学長

中川 洋

1972年1月～1979年12月



六代学長

木村 登

1980年1月～1982年8月



十一代理事長

平山 良明

2005年6月～2008年3月



十二代理事長

前川 博

2008年7月～2011年7月



七代学長

瀬瀬 教三

1984年1月～1995年12月



八代学長

平野 実

1996年1月～2003年12月



九代学長

薬師寺 道明

2004年1月～2011年12月



十代学長

永田 見生

2012年1月～2019年12月



十一代学長

内村 直尚

2020年1月～現在

本校教育のねがい

- 国法を基本として教育を行い、ひとの世の幸せと喜びのために力を尽くすべきことを人生の真理とする、誠実にして志気旺盛な人物を育成したい。
- 全人教育を基調とし、生徒の個性・能力を尊重して、自主性・創造性を培い、特にその人生に大きな意義を持つ青年期における志望の確立に力をつくしたい。
- 師弟・学友、共に学び、謙虚で向学心篤く、大学において、更に将来に亘って大いに学びうる人格の基礎を培いたい。
- 共に生きる人びとと互いに協調して、労苦を共にしうる、豊かな心情、闊達な気性を育てたい。
- 柔軟でしかも強靱な気力と体力をもち、環境の変化にも幅広い適応力をもつ身体と精神を鍛え上げたい。



久留米大学附設高等学校の校章は、昭和26年3月1日に制定された。

本校の前身にあたる久留米医科大学予科の校章を引継ぎ、芙蓉の葉を意匠化したものである。芙蓉は夏に咲く清楚優雅な花。芙蓉峰は富士山の雅称であり、志気高邁、優しい人物への願いがこめられている。

校章

校旗



校歌

久留米大学 附設中学校 校歌
附設高等学校
大石亀次郎 作詞
藪 文人 作曲

一、高良山下の学園に
万朶の桜咲きそるい
若き血潮の高鳴るを
見ずや 希望の揺籃地

二、江月冴えて 悠久の
流れは遠し 千歳川
高き彼岸の光明を
見ずや 試練の理想郷

三、修羅道の世を救うべく
平和の偉業 任として
築く不朽の真善美
見ずや 我等の大使命

目次

序文

世界と時代を牽引する人材の創出
町田 健 002

祝辞

永田見生 006 内村直尚 008
吉田清隆 010 藤本剛史 011
鹿毛勲臣 012 吉川 敦 013

新校舎と共学化について

校舎新築と共学化 014
共学化と「二人の校長」 036

教科について

教員の在職期間 040
国語科 044 社会科 048 数学科 052
理科 056 体育科 060 芸術科 064
英語科 069

扶桑学寮 074

教務部 078

生徒指導部 083

総務部 089

進路指導部 092

保健室 098

生徒相談室 101

図書館 104

中学卒論・制作の25年 109

同窓会

同窓会の歴史 113
同窓会の歴史年表 123
同窓会各支部寄稿 125
同窓会寄稿 137
各界で活躍する附設生たち 176

後援会

後援会の出来事 181
附設の保護者として 186

資料

組担任一覧 190
志願者入学者数推移 192
歴代同窓会長・副会長
歴代後援会長・副会長
歴代事務室長 193
新体育館・特別教室棟紹介 194
記念事業の実施概要 197
附設年表 198

編集後記 200



表紙のロゴ

附設高校75周年を記念するロゴマークのデザイン案を2024年冬に校内にて公募し、73回生・太田彩月さんのデザイン案が採用された。本誌表紙及び、記念品のキャンバストート・タンブラーのデザインで用いられている。



和而不同

初代板垣校長による「和而不同」。実物の所在が長く不明であったが、令和7年9月に開始された1号館解体工事の準備期間に無事発見された。

世界と時代を牽引する人材の創出



久留米大学附設中学校・高等学校校長
(高校23回生・中学1回生)

町田 健

附設の精神

久留米大学附設高等学校は、第二次世界大戦後の学制改革に伴い、1950(昭和25)年に新制高校として創立された。創立当初から高い水準の学力を有し、権威ある大学で研鑽を積んだ上で、社会に優れた貢献をなす有為の人材を育て上げることを目的とした教育を実践しており、初期の卒業生たちはすでに、九州大学をはじめとする難関大学への進学を多数達成している。創立当初は、現在久留米大学の文系諸学部を擁する御井キャンパス内にあった木造の校舎で、牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた男子生徒たちが黙々と勉強している学校だという噂が近隣には伝わっていた。もちろんそれは事実の一端に過ぎず、高度にして熱意ある教育が行われていたことは確かであるが、現在に続く生徒の自主性を尊重する自由な校風は、すでに着実に培われていた。それは現在と同様に、各種行事が生徒主導で実行されていたという記録によっても明らかである。ただし、文化系であれ体育系であれ、部活動は許可されておらず、常に勉学に専念する環境が重視されていたことは、各種の部活・同好会の活動が日常的に行われている現在とは異なっている。

高校創立後19年が経過した1969(昭和44)年に附設中学校が創設され、前期と後期の中等教育を総合的に連携した教育機関が久留米大学に誕生する。中学の第1期生は、その前年に現在の場所に完成していた鉄筋の新校舎で学ぶことになる。中学創立時の入学生は1学級45名のみであり、その後は3学級にまで増員されたが、気鋭の教師たちにより、中学生に対しては高度過ぎるほどの内容の教育が徹底的に実践された。ただし、生徒たちは中学生の頃から一人前の人間として人格を尊重され、

教員たちは理性と節度を持って教育に携わったので、自由を尊ぶ落ち着いた精神が附設の教育に横溢していくことになる。かかる先進的にして堅実な教育の成果は、中学の第1期生が高校を卒業する1975(昭和50)年に早くも輝かしく現前し、それまでは2桁に届くことがなかった東京大学への合格者が一挙に30名になり、附設の名前が全国に知られることになる。

中高一貫教育の完成を機にする飛躍の後、年によっては東大合格者数が50名を超えるほどの安定した進学実績を維持するようになり、全国有数の進学校としての地位を確固たるものにしてきた。この優れた実績を可能にしたのが、創立以来連綿と継続してきている附設の精神、すなわち、難解な入学試験を突破してきた高い知力と意欲を有する若者を、その自主性を尊重する自由な環境の中で、有能にして高い熱意を持つ教員たちが、個性と独創性が優れて発揮されるような適切な方法で指導することにより、大学での高等教育を経て練磨された結果、能力に応じた最大限の貢献を社会に対してなすことができるような人材を作り出すことに、最大の価値を見出すというものである。

現在、国内外の多くの領域で活躍する卒業生十数名を講師として招聘し、生徒たちの進路決定の参考となる経験や思考を提供してもらう「進路講座」を開催している。この講座は高校創立50周年を記念して開始されたものであるが、講師たちの経歴や活動は誠に誇るべき優れたものであり、附設の精神がその目的を遺憾なく発揮することで生み出された優秀な人材が、日本と世界を支える貴重な役割を果たし続けていることがよく理解される。

21世紀の附設

20世紀の終盤に起きたバブル景気とその崩壊による経済の停滞は、生徒の進路選択にも少なからぬ影響をもたらした。21世紀の初頭までは、医学部を志望する生徒はそれまでと同様に一定の割合であり、その数は他の進学校に比べて確かに多かったものの、東大や京大の医学部以外を目指す者の数を大きく超えるということとはなかった。したがって、東大への合格者数もそれまでと同様に40名前後を推移するのが常態であり、法学部や経済学部を出て官界、法曹界、実業界などの世界に身を投じたり、工学部や理学部を出て科学技術の発展に携わったりする者も少なからずいた。

しかし、経済の停滞が予想外に長引き、預金金利がほぼなくなると同時に、被雇用者が受け取る賃金の上昇が長期に亘って期待できない、将来の展望に暗い影が立ち込める時代が継続するとともに、生徒の志望の中心は医学部医学科へと収斂していくことになる。大部分の職業については、最も優れた能力を持つ人間であれば、成功を収めて高い収入を得ることができる。ところが、経済が停滞すると、最優秀の地位に準ずる地位以下の者が期待できる利益は、頂点を占める人間よりも遥かに劣ったものになる。一方、医師であれば、そもそも社会的に高い地位にあることが一般に認められているし、開業して自分の病院を経営せず、公私立の病院に勤務するだけでも、それ以外の職業人に比べて遥かに高い収入を、社会の変動に関わらず安定的に確保することが約束されている。

21世紀の前半を特徴づける日本経済の沈滞を主たる起因として、日本全国で、最も優秀な生

徒の大部分が医学部医学科を志望する傾向が極めて顕著になった。最優秀の生徒を多く擁する附設もその例外ではなく、上位層の生徒の大きな部分が、学費が多額ではない国公立大学の医学部医学科を目指すようになる。これに応じて、文科系ならびに医学部以外の理科系の学部を志望する生徒の数は漸減し、それによって東大合格者数が大きく減少することはなかったものの、40名を超えることは稀になり、これ以上の増加を期待することは難しくなっている。

2012年に、男女共同参画の理念を尊重すべく、附設が男女共学化に踏み切ったことにより、全体に占める女子生徒の比率は4割程度になる。高い学力と意欲を持ち、男性に伍して社会の上層でその能力を存分に発揮することを希望する女子であれば、現代社会において最優秀の者だと見なされる者たちが就いている職業である医師を目指すのは、けだし当然である。少し前までの女子の多くが文学部や家政学部、薬学部などを選択していたのとは事情が異なる。威信ある地位と、それに伴う恵まれた収入が約束される将来を、最上位層の成績を誇る女子が志望しない方が不思議だとも言える。

福岡県久留米市に位置する附設を卒業する優秀な生徒が志望する医学部としては、同じ福岡県に所在する九州大学が、直近で最も威信ある学府であることは確かであり、女子生徒の医学部医学科志望の傾向が高まるとともに、九州大学医学部医学科への合格者数が増加していく。2022年には合格者数が29名にまで達し、実にこの学科の3分1が附設出身者になるという、誇らしくも驚くべき事態が出来ることになる。

21世紀の前四半世紀を特徴づけるもう1つの事態は、2020年初頭より2023年春までの3年に

亘り世界を恐怖させた新型コロナ感染症の蔓延（コロナ禍）である。この疫病により、2020年前半に実施予定であった北海道でのスキー旅行や文化祭などの重要行事は中止を余儀なくされ、3月から5月までは政府の指示により学校そのものが閉鎖される事態となった。6月からの学校再開であったが、通学時の密集を避けるために臨時のバスを運行させたり、食堂のテーブルに衝立を設置したり、各教室に空気清浄機を備えついたりするなど、感染対策に多大な配慮をする必要が生じた。これらの対策には多額の臨時的費用を支出しなければならなかったが、この費用は同窓会からの支援金により賄われた。コロナ禍が終息を見ない2022年2月には、ロシアによるウクライナ侵攻が開始され、2023年10月にはガザ地区のパレスチナ人によるイスラエル人の拉致虐殺を契機として、イスラエルによるパレスチナ攻撃が始まり、第二次大戦後の世界秩序には劇的な変化が生じることになる。疫病と戦争は、人類の歴史が繰り返し経験してきた不幸であるとは言え、これらの災厄は極東の島国の、首都からは千キロも西方にある地方都市久留米に位置する学校での教育活動にも少なからぬ影響を与え、この経験は、どのような困難な状況であっても、若者が学ぶ貴重な時間を失わないように最大限の力を尽くす術を附設の精神に組み入れる結果をもたらしたものと考えられる。

1968(昭和43)年に鉄筋の新校舎と武道場が新設され、それ以来附設は現在のように久留米市野中町に位置するが、1989(平成元)年に2階建ての体育館が新営され、2012(平成24)年には共学化に合わせて現在のような5階建ての新校舎が建造された。現在1号館と呼ばれている運

動場南側の建物は、最初は図書館棟として建てられたが、後に増築して、大講義室・会議室や各科目の研究室、同窓会室などに利用されている。共学化により、体育の授業を実施するための空間に不足が生じるようになったため、高校75周年・中学55周年の記念事業の一環として、老朽化した1号館を解体してその跡地に3階建ての第2体育館を建造し、現在の校舎に併設する形で、新教育棟を建設する。教育の効率的にして円滑な実施のためには、設備の充実が肝要であり、この目的に沿った方針が、久留米大学本部の了承のもとに着実に実行に移されていることは、日本と世界を牽引する高度な人材を養成するための教育機関として恵まれた環境にあると見なすことができよう。

附設の将来

20世紀の終盤までは、附設に来る生徒の大半は福岡県の筑後地方と佐賀県東部地域の出身であり、東京や大阪などの大都市圏で附設の名を知る者は少なかった。しかし、その間でも、地域の最優秀の人間が集って互いに知性と独創性を鍛え上げ、これに対応するかのように、高い熱意と能力を持つ教員による高度にして緻密な指導が実践される状況は遅しく継続していた。その結果が誇るべき進学実績であり、こうして優れた教育機関としての魅力が全国的にも知られるようになって、21世紀が進むにつれて、福岡県の全域と佐賀県以外の福岡に隣接する熊本、長崎、大分、山口などの諸県からも多数の生徒が入学するようになった。九州新幹線が全線開通した現在は、鹿児島から新幹線で通学する女子生徒も数名ではあるが在籍している。

本校が現在のような優れた進学実績を達成し

続ける限り、福岡都市圏を中心として、九州山口の全域から生徒が参集する傾向は続くものと考えられる。ただしそれは、本校が現在のような、あるいは現在にも増して優れた進学実績を上げ続ける限りであって、万一何らかの理由で実績に翳りが見え始めたり、近接する九州一の大都市福岡市にあるどれかの学校が、本校に匹敵する、あるいは本校を凌駕する実績を上げることに成功したりしたとすると、首都圏にあり、かつては東大に何十名もの合格者を輩出していたいくつかの進学校と同様に、凋落の一途を辿ることになる可能性もないとは言えない。

附設が将来に亘って威信を維持する、もしくはさらに高めるためには、現在のように知的能力の高い生徒が入学を希望し、熱意のある教師が効果的な方法で指導を行うという状況が継続することは当然の前提であるが、それだけではなく、教育の内容とその目標が、時代の要請に適合するものであり続けることが必要である。今世紀前半は、医師を職業として選択することができる大学への合格が望まれる情勢にあるが、人口の大幅な減少が確実に見通される現実を見ると、この傾向が後半にまで継続するかどうかは不透明である。行政や経済を動かす優秀な人材が求められるのはどの時代にも変わらないことであるし、近年の人工知能の驚くべき発展は、この分野への人材の投入が社会的に要請される状況の到来を予想させる。教育の国際化も、特に社会の上位層に属する子弟を受け入れるための必須の条件になる可能性がある。時代の要請を見極めるのは、常に容易であるとは限らないので、久留米大学と協力しながら、附設の構成員による情勢の正しい認識とそれへの適切な対応が肝要である。

創 立 75 周 年 を 祝 し て



学校法人久留米大学
理事長

永 田 見 生

学校法人久留米大学の前身は1928(昭和3)年創立の財団法人九州医学専門学校です。その後、1943(昭和18)年に財団法人九州高等医学専門学校に、1946(昭和21)年に財団法人久留米医科大学に、1950(昭和25)年に財団法人久留米大学に変更されましたが、私立学校法の制定により大学は財団法人から学校法人に組織変更されたので、1951(昭和26)年に名称が学校法人久留米大学に変更され、2028(令和10)年4月で創立100周年を迎えることとなります。

本法人の歴史において、附設の創立は大変重要な意味合いを有しております。当時の財団法人久留米医科大学は、戦後の新しい教育制度の確立に応じ、医学部・商学部からなる総合大学として、かつ、小学校から大学に及ぶ一大学園建設を志向し、その第一着手として附設高等学校の創立を図り、1950(昭和25)年2月27日に、当時の文部省から久留米大学附設高等学校の設立が認可されました。ちなみに、附設高等学校の設立趣意書には「ここに於いて、一步をすすめて大学教育の基礎を培おうとする学園内部（本法人のこと）の要求と、九州私学の権威としての本学園に対する世論の期待とに应运え、今度、特色ある新制高等学校を附設しようとするものである。」と記されています。附設高等学校は、創立当初は御井町の久留米大学商学部構内に設立されておりましたが、1968(昭和43)年に、九州医学専門学校創立にあたり寄与していただいたブリヂストン創業者の石橋正二郎氏から、財団法人石橋財団を通じて移転用地買収資金を寄付いただいたことから現在地の野中町に移転、翌1969(昭和44)年に附設中学校が設立され中高一貫教育が発足しました。その後、2005(平成17)年に高等学校が男女共学に、そして2013(平成25)年に中学校が男女共学になりました。これらの改革により、さらに学力レベルは向上し、難関大学への進学率が上昇しました。このような体制を構築した当時の学校法人上層部の勇気ある決断に敬意を表します。

このような変遷をたどりながら発展してきた附設高等学校と附設中学校は、このたび高等学校が創立75周年を、中学校が創立55周年をそれぞれ迎えることから、この節目に様々な記念事業を行うこととなりました。本法人といたしましては、今回の記念事業を通じ、教育環境を充実させ、更なる教育効果を得るべく、施設・設備の拡充に努めてまいります。保護者の方々あるいは同窓生の方々におかれましては、ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

さて、附設高校の校歌は大石亀次郎先生が作詞されたものです。草創期の1950(昭和25)年3月末に、明善高校の国語教師であった明治生まれの大石亀次郎先生を国語教師(漢文)として附設に迎えるにあたり、初代校長である板垣政参氏と元明善高校校長で附設の副校長となる檜崎広之助氏が大石先生宅を突然訪問され、「人物の薰陶(すぐれた人間をつくること)はこの機にある。国家有用の人物養成の為に高等学校が誕生した。ついては、育英壇上に出馬せよ(英才教育をするために教壇にたって欲しい)。」と懇願され、大石先生は「一晚熟慮の上、板垣、檜崎両氏の熱意と知遇とに対し、天下の英才を得て、国家奉公の任に当たることにふみきった。」と「教壇五十年」の自伝に記載しておられます。そして、1950(昭和25)年4月、新設された久留米大学附設高等学校常任講師に就任され、漢詩・漢文の教育を通じて人間教育に尽くされました。また、久留米大学初代学長の小野寺直助学長や板垣政参校長の意を汲んで、附設高校開校2年目の1951(昭和26)年5月頃に校歌を作詞され、文語調で難しいので、大石先生自らが「附設高等学校二十五年史」に「附設高校歌解」という解説を寄稿されています。それによると、1番)「高良山下の学園に：九州の名山の下、環境のすぐれたこの学校に」、「万朶の桜咲きそろい：粒揃いの秀才は集った」、「若き血潮の高鳴るを：意気高く理想に燃ゆる我々青年の」、「見ずや希望の揺籃地ようらんち：この揺りかごで育ち行く我らの雄々しき姿を見て居て下さいよ」。2番)略。3番)「修羅道の世を救うべく：汚濁争乱の人の世を救うために」、「平和の偉業任として：平和幸福の建設この大事業こそ我らの任務だと自覚して」、「築く不朽の真善美：学術の真理、道德の至善、芸術の審美」、「見ずや我等の大使命：之を不朽に築いて行く覚悟と我らがこの大任務の遂行とを見守って居て頂き度い」と、今も附設生を叱咤激励されています。記念式典では校歌斉唱を行うと思いますので、先哲の趣意を想起し、万感の思いを込めた校歌の大合唱を期待しています。

最後に、附設生の皆さん方におかれましては、自身の才能や個性を発揮し、また、社会の要請に応えるため、自らが獲得した素晴らしい能力と育まれた人間性にさらに磨きをかけ、修羅道の世を救うべき使命を果たす役割を担う人間として成長し、日本を世界で輝く国に導いていかれることを期待しております。

附設高等学校創立75周年・ 中学校創立55周年を祝して



久留米大学
学長

内 村 直 尚

附設高等学校創立75周年及び中学校創立55周年を迎えるにあたり、心よりお祝い申し上げます。

昭和25年の創立以来、我が国の教育界における幾多の変遷を経ながらも、貴校は「真に国家社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物の育成」という建学の精神を不変の信念として掲げ続けてきました。この精神は、単なる理想ではなく、日々の教育実践に根差した、生きた理念として、教職員の皆様の胸に、そして多くの生徒たちの心に息づいています。

また、「豊かな人間性と優れた学力とを備えた人間を育成すること」という教育方針は、貴校の根幹を成すものであり、この教育方針は、創立から現在に至るまで一貫しています。学力偏重でもなければ、情緒に偏ることもない。その均衡の中にこそ、社会に真に貢献できる人物が育つという信念のもと、貴校はこの75年間、数多くの人材を輩出してこられました。

このような実績と信頼が積み重なり、貴校は今日、国内でも屈指の進学校としての地位を確立されています。多くの卒業生が、学术界・産業界・公共政策・医療・文化芸術など多様な分野において活躍され、その原点が貴校にあると語ってくださる姿に、私たちは教育者として深い感動と誇りを覚えます。そして、そのような歩みを可能にしたのは、何よりも貴校に関わるすべての方々の熱意と努力の賜物であると、改めて認識しております。

歴代の校長先生方、教職員の皆様におかれましては、生徒一人ひとりと真摯に向き合い、心を込めて指導を続けてこられたことに、深く感謝を申し上げます。保護者の皆様には、いつも温かく学校と生徒を見守っていただくとともに教育活動を力強く支えていただきましたことに、心より御礼申し上げます。地域の皆様にも、長年にわたりご理解とご協力をいただき、また、成長を共に見守っていただいたことに、感謝の思いは尽きません。

在校生の皆さん、皆さんが日々学ぶこの学び舎は、75年という長い歲月の中で築き上げられてきた知の集積と精神の伝承が息づく場です。ここで得られる学びは、単なる受験のための知識ではありません。自ら考え、判断し、責任を持って行動する力を育てるものです。「為他の気概」とは、自らを高めるだけでなく、他者のために力を尽くすということ。その姿勢は、これからの社会が最も求める資質となるでしょう。皆さんには、誠実であること、努力を惜しまないこと、人と協働する姿勢を大切に、未来への一步を力強く踏み出していただきたいと願っています。

卒業生の皆様、皆様の歩んでこられた人生は、そのまま附設高校・中学校の歴史の一部です。それぞれの分野で活躍されているお姿を見るたびに、皆様の母校の理念が社会の中で息づいていることを実感します。これからも、その存在が後輩たちの目標となり、希望となるよう、母校と共に次代を担う若者たちの育成に、どうぞ温かな眼差しとご支援を賜れば幸いです。

そして貴校は今、次なる節目——100周年に向けて、新たな教育の挑戦を始める時期に来ております。AIの進化やグローバルな課題、多様性への理解、持続可能な社会の実現といった、これまでとは異なる問題が次々と現れる未来において、教育はますます難しく、そして重要な意味を持つものになります。

その中で貴校は、「学力と人間力の両立」という理念をさらに深化させ、思いやりと知性を兼ね備えた新たなリーダーを育てる場として、進化を続けていくと確信しております。今後は、探究型学習の充実、グローバル教育の強化、多様性を尊重する学びの環境整備など、未来を見据えた改革にもより一層積極的に取り組まれることを願っております。

結びに、本日この佳節を迎え、改めて75年の歩みを振り返るとともに、未来への希望と責任を新たに作る機会となりましたことに、心より感謝申し上げます。貴校に関わるすべての皆様のご健勝とご活躍を祈念し、今後のますますの附設高等学校・中学校のご発展をこころよりお祈りして、私からの祝辞とさせていただきます。

温故知新 そして世界一の同窓会へ



久留米大学附設高等学校
同窓会 第8代会長
吉田 清隆
(23回生)

久留米大学附設高等学校・中学校の教職員および学校法人久留米大学関係の皆様、高校創立75周年・中学創立55周年おめでとうございます。創立以来75年に亘り学校の育成、発展に尽くしてこられた歴代の校長先生や教職員、学校法人久留米大学、更には保護者や諸先輩の方々の教育に傾ける情熱と努力に感謝します。

同窓会は、1回生が大学生の時に板垣政参校長を訪ねたことに始まり、1957年8月に設立されました。1回生は90才を迎え、10年後の85周年には100才、校歌の作詞でも知られる大石亀次郎先生に並びます（先生は104才で他界）。今春には73回生が卒業し、同窓会は卒業生総数14,000名、在学会員600名、全国に12の支部を抱える組織となりました。

同窓会の目的は、規約第2条に「会員間の互助親睦並びに母校の発展を図る」とあり、同窓会発足時から変わっていません。「母校の発展を図る」面では、周年事業や記念事業へは同窓会をあげて委員会や募金活動に協力しています。奨学金制度は1958年に同窓会が始めたことに由来します。1983年度からは部活への財政的支援を始め、今は文化祭（男く祭）や体育祭も支援しています。学校主催で毎年秋に開催される「進路講座」には、各界で活躍する同窓生を講師として派遣しています。

「会員間の互助親睦」については、長年の夢がかない、2024年4月に全国12番目の沖縄支部を設立することができました。互助親睦を活性化し発展させるために、各地の支部やOB会を中心に活動が行なわれています。人数の多い福岡支部や東京支部では、若手歓迎会、回生代表世話人会、サロン・ド・附設（福岡）、附設塾（東京）、就職セミナー（東京）など、シニアから若手まで楽しく懇親を深め、進路や悩みごとなど個人的な相談にも積極的に応じる体制としています。

今の校門とその周辺や扶桑学寮は50周年事業により、校舎は60周年事業により建築整備され、学びの場、生活の場として素晴らしい環境となりました。75周年事業では、第2体育館、特別教室棟及び中学寮が建築整備され、文武両面での施設が整います。そして募金によって「憩いの森」が癒しの場、語らいの場として整備されます。

学校は中高6年間ですが、同窓会は卒業後ずっと同窓生を支援して参ります。グローバルな世界を目指す若者が輩出され発展していく附設高校の未来を願いつつ、同窓会は日本一、世界一の同窓会を目指します。

75周年を迎えて —近年の後援会—

久留米大学附設高等学校が創立75周年、附設中学校が55周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。また、この記念すべき節目の年に後援会会長として本校の教育活動に関わることができたことを、卒業生の一人（中学校19回生、高校41回生）として大変光栄に存じております。

久留米大学附設中学校・高等学校後援会（以下、後援会とします）は、2000(平成12)年度以来、「学校と家庭との連携を図り、相互理解と信頼を深める」ことを第一の活動方針とし、そして、「保護者相互の交流、親睦を深めるためのネットワークを築く」ことを第二の活動方針として、活動を続けてきております。これは、学校と家庭だけでなく会員相互間の情報共有とコミュニケーションが後援会活動において最も重要である事を再確認したものです。

一方、このような後援会活動も、2020(令和2)年1月に始まる新型コロナウイルス感染症蔓延の影響を大きく受けることとなりました。とりわけ、国から福岡県に対して緊急事態宣言が出された同年4月から2021(令和3)年9月までの間は、学校行事、保護者等の飲食を伴う懇親会等、多くの行事が中止となりました。後援会としても初めての経験で、対応に苦慮しご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。新型コロナウイルス感染症の影響が弱まった2022(令和4)年度以降は、それまで停滞していた「保護者相互の交流、親睦を深めるためのネットワーク」について、再活性化に取り組んできております。行事、その他も新型コロナウイルス感染症の蔓延前の状態に戻り活気も戻っているのではないかと思います。

本校が今後より一層発展することを祈念いたしまして祝辞といたします。



後援会 会長

藤 本 剛 史

祝 辞



第七代校長
(1993～1998)

鹿毛 勲 臣

先の大戦後における教育制度改革により、義務教育が9か年に延長され、小学校の上に新制の中学校と高等学校が創設されることとなった。そして、中学校は1947(昭和22)年度から、高等学校は1950(昭和25)年度から発足することとなった。

丁度この時期、久留米大学の卓見により創設されたのが、久留米大学附設高等学校である。

新設の高等学校と言うものの、当時は未だ戦争の創痕から癒えず、世は困窮と混迷の時期であり、旧制中学校から移行した公立高等学校等とは異なり、校地・校舎は固より施設・設備に至るまで、学校の体を成すにはあまりにも程遠いものがあつた。校地は雑草生い茂る旧陸軍の廃墟の地、校舎はこの地に放置されていた粗末な木造兵舎、施設・設備に至っては言わずもがなである。

一方、専任の師は高德にして碩学の誉れ高い校長先生ほか僅か6名であつたが、物的条件とは裏腹に、人格・見識ともに優れ、かつ限りない情熱を持たれた教導の師ばかりであり、このことは不備な物的条件を補完するに余りあるものであつた。

このような環境の下で産声を上げた高等学校が75年、その後に誕生した中学校が55年の星霜を経て、今や全国に名を馳せる学校となったことは誠に慶賀の極みであり、本校揺籃期の3年間をお世話になった高等学校1回生の一人として衷心よりお祝い申し上げるところであります。

ところで、附設中・高校がこのような発展を遂げて今回の吉日を迎えることができるのも、学校法人久留米大学は固より、崇高なる建学の精神と教育理念を以て本校教育の礎を築かれた初代校長板垣先生を始め学校関係者のご尽瘁及び同窓生各位のご尽力、更には本校興盛のためにご支援を賜った関係各位のお蔭である。

特に「世のため人のためになることを考えておけば人間決して失敗することはない。学問も大事であるが世のため人のために一生を尽くすという信条を身につけることがより大事である。」(石橋正二郎氏回想録より)——私たちが範とすべきこの人生哲理を以て「国家有為の人材育成の一助になれば……」という篤志により、本校の用地を無償にてご寄贈いただいたブリヂストンの石橋家には特段の感謝を申し上げなければならない。

ところで、「事の成るは、成るの日になるにあらず。その源たるや遙かに遠し」という。願わくは、これから本校で学ばれる皆様が、高等学校75年、中学校55年の歴史と伝統に思いを致され、更に優れた歴史と伝統を創造・累積されて進まれんことを、お祈りするものであります。

祝 辞

久留米大学附設高等学校（以下では、「附設」と略称させていただく）は本年2025(令和7)年に、1950(昭和25)年4月の創設から数えて、75周年を迎えた。附設は、この75年の間、一貫して、自由で独立した人格の人々の拠りどころを志向してきた。附設は、今後も、この点ではいささかも変わることはないだろう。

75年の重みは、ここにある。まことに慶賀に値する。縁あって関わることができた身として、誇らしく覚えるが、幸せを噛みしめてもいる。

附設を船にたとえれば、大きな嵐にも巻き込まれず、漂流や難破あるいは座礁という越えがたい危機に遭遇することもなかった。船体と羅針盤 — 学校の文化・伝統・関係者の不断努力・出身者の社会的存在感 — そして、乗員・乗客 — 教職員と生徒・保護者 —、すべてが整っていたからこそその安定した航海の賜物であった。

学校は公的な存在であり、社会的な責任を負っている。しかし、「あり方」としては、その時どきの社会状況 — 風潮 — に影響される。ここは、漂流を引き起こしかねない危険をはらむところでもある。針路の設定と潮目の読み取りが適正であれば、正しい海図が作られ、いたずらに漂流することはない。当然、今後も、この基本が適切に守られる限り、安全な航海が続けられるに違いない。

しかし、これまでの附設は僥倖にも恵まれ、安易な点もなかったとは言えまい。日本社会の繁栄へのやや単調な依存に支えられても来た。日本社会の繁栄に疑念が生じた今、学校、特に、附設は、これまで以上に、社会の後追いに安住はしないような人々が集う場でなければならぬまい。

学校とはそもそも何なのか、改めて考えてみよう。本質にかかわる問いに直面し、臆せずに解答を探り、その上で行動に活かそうという営為の場ではないだろうか。

今後も、附設なればこそその健闘を期待し、信じて、拙文を閉じる。



第十代校長
(2008～2017)

吉 川 敦

校舎新築と共学化

—久留米大学附設高等学校・附設中学校の場合—

1.

わたくしは縁あって久留米大学附設高等学校・中学校（以下では「附設」と略称する）の校長を3期（2008年4月～2017年3月）務めた。校舎新改築や共学化を含めて、この間の事情は、退任後半年余り後に出版した次掲の書物に記した。

『〈進学校〉校長の愉しみ 久留米大学附設での9年』 石風社 2017 ISBN978-4-88344-275-1

同書「まえがき」で述べた通り、わたくしなりの私的なアーカイヴである。しかし、何十年か後の附設人の参考になれば嬉しいというつもりもあった。また、校長着任時に、前任の諸校長の記録のほとんどが散佚していたことは困惑でしかなかったこともある。

このたび、『久留米大学附設高等学校・中学校 75周年記念誌』発行委員会から、在任中に関わった「新校舎建設・共学化」について、その経緯のみならず総括を含めた記事の寄稿を依頼された。少なくとも経緯の一端は、すでに上述の書物に書き込まれており、一方、共学化の総括となると、共学化世代はまだ社会を牽引するほどには成熟しておらず、今でも時期尚早かもしれない。

新校舎と共学化は、しかし、附設という学校からの社会への提案の発信であって、生徒たちが形作る望まじき未来の土台の構築を宣言するものである。節目となるべき時点に巡り合ったわたくしが、機会を活かし、きちんと役割を果たしたかどうか、これは後世に判断を委ねることではあるが、そのための材料は多いに越したことはないだろう。

記念誌発行委員会は、内容的にも相当の自由

度を保証してくださったので、新校舎建築計画（2008～2012）に携わって学んだこと、込めた想い、また、共学化と新校舎、学校と社会との関わりなどをちりばめた、やや雑然とした文章を用意することにした。

なお、関連するファイル類の多くは手元に残っており、それらを繋ぎ合わせるだけで、最終的な形に収束するまでの経過についてかなりのことが書けるのだが、それらのファイルは校長として着任した時点での計画案から始まっており、そこに至るまでの関係者の苦労は捨象されてしまったものでもあることを思い、敢えて余り踏み込まないようにもした。

関連しての提言だが、附設における歴史授業において、特に、〈演習〉として（ある時期の）「学校史」を、ここが大事なところだが、できる限り「一次資料」に基づいて記述するという訓練が課されるべきだと申し上げておきたい。「学校史」と一口に言っても、体育祭史、文化祭史、部活史、その他、校内植栽史、使用教科書史、試験史、など、テーマはいくらでもある。校舎の改築史も立派なテーマになる。これらを「一次資料」に基づいて記述するという訓練の有無が、ものの見方に大きな違いを齎すことは想像が付くだろう（もっとも、わたくし自身はそういう訓練を自らに十分に課して来なかったために、今は悔いることばかりである）。校長在籍9年間に蓄積されたこれらファイル類は、このような訓練のための「一次資料」としての利用を期待して、附設にお渡しすることができたら幸せである。

2.

2008年度は、校舎関連の文書をいくつも作成した。現存の附設校舎の建築の開始点を示す文

書（2009年1月。第748回学校法人久留米大学理事会提出）を再録する。正式に再提案が承認されるのは、2月の第749回理事会であった。その具体的な内容は、後掲の再録文書3（2009年3月。職員会議連絡報告事項）に収める。

（再録文書1）

理事会再提案について

先に、第714回理事会（平成18年2月）において、久留米大学80周年記念行事の一環として（平成22年に附設高等学校60周年を迎えることも加味して）ご承認いただいた附設高等学校・同中学校の校舎等の改新築であるが、具体化の段階で種々検討をした結果、以下の理由で、当初案を改訂した上で、再提案申上げたい。

検討に際し、次の3点に留意した：

1. 校舎新築の主な理由は、現校舎が現行の耐震基準に適合していないこと、かねてより福岡県より40人学級の実現の指導を受けていること、および、平成17年度からの高校共学化に伴う諸施設の拡充の必要性の3点への対応である。
2. 他方、現校地は風致地区の指定を受けており、建築上の種々の制約がある。
3. 現行の附設高校・中学の教育内容の水準の改善少なくとも維持を前提とする。

当初案は、何らかの事情で、40人学級による学級増が特に理科系の実験室授業へのカリキュラム編成に及ぼす効果を読み込んでおらず、したがって、実験室数の想定が基本的に不足していた。さらに、計画案当初の時点では明らかではなかったこととして、本校を巡る競争条件の悪化への対応が十分ではなかった。特に、新校舎供用期間中の附設高校・中学校の将来像の読み込みは全くなされていなかった。これらと、

上記3点の要請を調和させた案で、学校法人と協議の結果、以下の形に建築案を改めた。

- a. 概ね1万平米の、旧高校寮を取壊して現校舎に接続して高校棟を建設する。
- b. 中学棟は高校棟建設完了後に現校舎を取壊して建築する。中学棟には将来構想への対応可能部分を準備しておく。
- c. 現一号館（管理棟）は現校舎との渡り廊下を取り外し、内装を若干手直しして、供用を続ける。
- d. 新高校棟には、新中学棟建設完了まで、現在の附設高校・中学の全学級と関係教室等を收容し、新中学棟完成後に全校40人学級化を開始する。
- e. 新図書館は新高校棟内に設けるが、旧図書館からの移転は中学棟完成後とする。
- f. 新高校棟内の諸施設は、図書館に限らず、本来機能とは別に、新中学棟完成までは職員室、会議室、教室等への流用も可能とする。

上掲の再録文書1では、新校舎建築の理由として、3点、すなわち、二号館校舎等の阪神淡路大震災以降に改訂された耐震基準への適合化対策、福岡県から勧告されていた40人学級化への対応、高校女子生徒受け入れに伴う施設整備、が挙げられている。3点相俟って、既存校舎の耐震補強では済まなくなったわけである。

附設の校舎新築は、要するに、附設が予てより課題視していた諸事について、久留米大学および同附設高等学校の創立周年行事の一環として、解消改善を期したものであった。

経過をたどると、2005年度の高校女子生徒受け入れを端緒として、校舎改築が必要になり、改築の認可条件として（県から）40人学級化への対応を求められ、加えて、阪神淡路大震災による耐震基準改訂があって、相当規模の校舎の

増改築が課題になった。そこを、上記の周年行事に合わせて実行する運びになったのである。

しかし、当初計画案には、いくつかの重要な点に難があった。難のうちには、学校の存立に関わるものもあり、特に、適切な増収策を欠いていたことが大きかった。40人学級化は、学級増を伴うものであり、当然、教員増や関連する経常費の増を伴うが、増収策は、学校法人久留米大学からの支援増が主で、授業料の値上げあるいは生徒定員の増という附設独自の策は特になかったのである。

福岡県の児童生徒数の状況から、高校については生徒の定員増が認められず、一方、中学校については、当時の定員の1学年150名から高校定員の1学年200名までの定員増は可能であったが、高校の共学化のもとでは、中学の共学化が定員増の認可条件であった。

上掲の再録文書1には、中学を共学化するとは書かれていない。しかし、1学年150名の明言はないので160名と考えるのが自然であることから、もし塾関係者などの事情通が目になることがあれば附設は共学化に踏み切ったと読み取られてもおかしくはなかったと思われる。

一方で、財政的には、中学1学年200名が望ましいと考えもした。しかし、真の中高一貫校として、6年間で掛けて実現されるべき「附設としての教育」が確立できていたわけではなかったもので、当時としては、この辺が合理的であったろう。将来的には、しかし、人口動態に応じて高校の定員を（例えば）1学年180名に減らすことも想定しなければならず、その際は、中学の定員を1学年180名に増やすとともに、高校での入学者募集を欠員補充程度に留めることが必要になるだろう。

なお、競争条件の悪化とは、直接的には、早稲田佐賀中学校・同高等学校（佐賀県唐津市）の設立（2010）を意味しているが、むしろ、福岡県立の中等教育学校の設立などを意識していた。

3.

ここで、再録文書1に至るまでのことに触れておこう。

わたくしが附設の校長になったのは、2008（平成20）年4月、久留米大学創立80周年の年であった。これは、1928（昭和3）年の財団法人「九州医学専門学校」設立から数えてのことである。時が経ち、1950（昭和25）年、敗戦後の教育制度改革に伴う新制度のもとで、学校法人「久留米大学」が医学部に商学部と附設高等学校を新たに加えて発足した。附設高等学校は1968年夏に現在の野中校地に移転し、翌1969年附設中学校が設置された。附設を単体で捉えようと、高校創設から58年、中学設置から39年しか経っていないが、言わば、60周年（40周年）行事の先取りとして、附設に於いても、野中校舎の建替え（新校舎計画）が計画された。

新校舎計画は、2005年度に遡る。第八代校長の樋口忠治先生が、高校の女子生徒受け入れ実現から1年を経て、法人の理事会（2006年2月）に提案し、承認を得たものである。樋口先生は2006年3月一杯で退任されたが、計画案は、次代校長の古田智信先生によってまとめられ、新校舎の当初図面は2008年3月に法人に提出された。この2年間、在校生や卒業生、特に、同窓の建築家諸氏は「附設アーキテクト21」を組織して、夢の新校舎を論じた。実は、わたくし

は、先述の通り、どのようなアイデアが飛び交ったのか、詳細を承知していない¹。

前後するが、わたくしの附設校長就任の経緯は、上掲の拙著に書き込んだから省略するが、樋口先生行きつけの六本松の喫茶店で、先生の附設に対する熱い想いに接したことが重要な契機をなした。その折りは、高校募集分の女子生徒の受け入れのことは伺ったが、校舎の増改築には触れられなかった。校舎の件は、古田先生の許でまとめられ、法人の理事会では新校舎の基本的な構成図が了承予定（4月）なので、今や済んだこととを考えておられたのであろう。実際、わたくしが新校舎計画を知ったのは、3月末、学校法人理事会での校長選任後に、樋口先生から紹介された当時の古賀暉人同窓会長ご持参の図面を通じてであった²。

ともかく、2008年4月に、わたくしは附設の校長になった。4月末の理事会での附設校舎の新增設案の承認は、久留米大学創設80周年行事が優先されたために遅れてしまったが、できるだけ早い理事会での承認を得るべく、法人の財務部施設課を中心として具体的な新增築計画のための準備が始まり、5月早々に初回の現地調査や備品調査が行われた。

しかし、ここに至って、計画案の不備が露呈してしまった。直接的には40人学級化に伴って図られた程度の補強措置では、理科の場合、実験室の数や面積および担当教員の不足から、従前の水準が維持できるような授業計画が立てら

れないということであった。他の教科でも、似たような事例が予想された。その修復や対策の複雑さをご想像いただけるだろう。当初案での旧校舎取り壊しや建設中の仮校舎計画については記憶がなく、手元に資料もないので、当初案が法人側の初回の現地調査の段階で停止に至ったことが推測される。

この辺の事情を示す資料として、授業再開に備えた運営委員会（2008年8月27日—当時は、春秋の二学期制を採用していた）に提出した文書を示そう。まだ、上掲の再録文書1とは距離のあるものであるが、校舎計画の推移の様子が述べられている。

（再録文書2）

運営委員会資料

平成20年8月27日

校長

① 施設課での件

1. 8月21日(木)午後4時から、附設校校舎新改築計画についての打合せを行なった。当初目的は、職員研修会（8月19日）研修Ⅱで示した図面を巡る協議であった（ただし、研修Ⅰで述べたような方針変更³も視野にあり、施設課の段階で判断できる状況ではなかったが、後述するような貴重な指摘がいくつかあった）。

2. 附設校校舎の新改築計画について復習をしておく。

(a) 久留米大学80周年記念行事の一環として、

1 附設アーキテクト21の一員、佐々木郁夫氏（27回生）からご提供を受けた参考資料：1）久留米大学附設高等学校同窓会・附設アーキテクト21：久留米大学附設高等学校・中学校校舎の建て替えに関する要望書（2007年4月13日）2）久留米大学附設中学校・高等学校新校舎建設委員会：「附設ルネサンス計画」基本計画（2008年1月）がある。校内における検討は「新校舎建設委員会 検討報告書」（2007年7月～2008年1月）にまとめられた（ただし、わたくしは見えていない）。これらを踏まえて、学校法人久留米大学財務部施設課が当初の図面を作成したものであろう。

2 当初図面、少なくとも、概要図や基本仕様は、校長着任後、手元に備えていたはずだが、ハードコピーでもあり、残っていない。法人の施設課か附設事務室が保存しているかどうか。

3 参考資料（pptファイル）：附設の方向性について（問題提起）。本稿付録に再録する。

校舎の新改築を行い、

i. 現行の建築基準法に適合した耐震性の獲得

ii. 県からの指導のあった40人学級化（27学級化）

の実現を図った（平成17年）。

(b) この提案に基づく概ね20億の基金積み立てが理事会で承認された（平成18年）。

(c) 施設課との協議を経て、附設の新校舎改築計画の図面案を法人に提出した（平成20年3月）。

(d) 当初予定では、4月度理事会において建築計画の承認を得、現時点では、すでに、旧高校寮の取壊し、整地等が済み、基本設計、詳細設計を経て工事発注の準備段階にあったはずであったが、諸般の事情で大幅に遅延していた。

(e) 理事会提案の準備の一過程として施設課から求められた備品配置の詳細検討によって、提出図面案に関して、27学級体制下での教育編成に応じた特別教室、実験室の数や配置、図書館面積などの点で不足があり、附設校の教育機能の維持に適していないことが明らかになった（5月～6月）。

(f) 理事会提案のために3月提出の附設校図面案の手直しを試みたが、教育機能の強化と想定延べ床面積の限界との衝突、および、新改築後の校舎の供用期間内に予想される将来変化への対応の配慮余地もなく、校舎新改築と教育機能の強化との矛盾の解消は容易ではないと思われた。

(g) 6月度の理事会において、現行の附設校校舎の新改築案について再審議する時間的余裕を求め、7月11日に学内教学関係理事（学長、各学部長、病院長）に対し、7月15日に法人執行部理事に対し、再審議すべ

き理由について、まず、

i. 附設校の現況

ii. 教育上必要不可欠な設備

iii. 予測される将来環境

を述べ、新改築後の校舎はこれらの要請を満たすべきものでなければならないのであるが、提出済みのものは、この意味で解消しがたい不備があるからであると説明した（このままでは戦っていけないと言った）。ただし、この段階では、校内での審議が行なわれていないこともあり、中学12学級、高校15学級を前提にした。

(h) 7月度の職員会議（7月17日）に前項の概略を述べた。特に、教育上必要不可欠な設備について、主に、高校教員側に尋ねまわり、建築家に指示して、図面を描いてもらい、それを掲示して、さらに、意見を求め、それらを反映させて、新たに描いてもらった図面を施設課に提出した（8月4日）。この図面が研修会の研修Ⅱで説明したものである。

(i) この図面案は（施設課の検討では）延べ床面積が13000㎡余り、経費として、（現在の基準でも）32億掛かるということであり、用意してある基金の範囲を大幅に超えているということである。

(j) 現在の提示案には、先日の研修会の折に、一部の方の慧眼にも明らかのように、将来の変動への対応を図って不急な部分も含ませてはあるが、（27学級下での）教育上基本的に不可欠なものであり、もっと増強されていてもおかしくないものである。将来の増設増築対応を期待するにしても、新改築段階で中途半端な構造物を作ることは許されないであろう。

(k) 職員研修会の前日、石内商学部長に会う

機会があり、状況を説明し、「金策」を検討してみたが、18～20億と32億の差は大きく、新校舎の機能面を重視すると、「将来構想」を打ち出しての「法人の経営判断」によって提案に近い計画案の承認を求めるという選択肢もあるのではないか、という示唆を受けた。人口減対策などで将来構想は早晚課題になることではあり、意見は持ってはいるが、校内ではこの方向の審議が一切行なわれて来ていないようなので、逡巡する面もあったが、当日中に、県の私学振興課において可能性の検討を行ない、中学定員の増は可（高校は不可）、ただし、高校共学化のもとでは、定員増は共学化が前提、という見解をもらった。

- (l) ここまでが、研修会までの経過の詳細である。
- (m) 法人の経営判断として承認を求める案は、
ア. 久留米大学80周年・久留米大学附設高等学校60周年・久留米大学附設中学校40周年
イ. 九州新幹線開通
ウ. 現行の建築基準法に適合した耐震性の獲得
エ. 県からの指導のあった40人学級化
オ. 将来構想としての中学15学級化・共学化
カ. (中学15学級完成時点翌年からの高校募集停止)
に相応しい新校舎の建築である。現在の提案より1000㎡程度増やした図面を用意しなければならないが、図面はまだ完成していない。
- (n) 生徒定員増により、教員を（理論的には）9名程度増やせる。
- (o) 問題点は、上記オ、カの2項であって、

これらは、これまでの附設校の文化にはないものである。

- 3. なお、7月15日の説明の際、法人側より、諸般の事情に鑑み、9月度の理事会で再提案を求められたが、9月度の理事会は前倒しされたこともあり、10月度の理事会まで再提案の猶予が生じた。

② 各理事との面談について

経緯 8月21日の施設課との協議の前、午後1時過ぎから午後4時近くまで、数名の大学の幹部との面談機会があった。

薬師寺学長 この変動の激しい時代に変化を先取りしておくことは大切だ。少子化、社会構造の変化、日本の国際的地位の変転などの要素があり、気づいたときには身動きできなくなっているようでは困る。ぜひ協力したい。
前川理事長 着任したてで経営判断をすぐに下せる立場ではないが、できるだけ早く学内を見回り、附設にも準備出来次第早速お伺いしたい。

神代常務理事 附設がよくなることは大歓迎である、同窓会や現場の先生たちは大丈夫か。附設校が一枚岩でないと、法人の説得はできない。

岩元常務理事 18億が32億でしょう。それがもっと規模を大きくしてとは、卒倒する思いだ。教学理事たちは経営のことはわからないから……。附設の建物は耐用年限から言うと、久留米大学90周年で考えてもよかったのだが、耐震性や40人学級の問題があって、人件費を考えても頭が痛い。資材高騰の折から、18億から数億増える、まあ、21、22億ぐらいまでは覚悟していたのだが、今の計画案では将来立ち行かなくなるって言うんでしょ。今は、法人も80周年の建築で大変だし、先行き、消

費税のこともあるし、何期かに分けて対応できるかな。一応、計画案が出てから検討してみよう。でも、10月の理事会には間に合わせてもらわないと、ずるずると遅れて行くだけでしょう。

③ 施設課のコメント

1. 提出済み図面案について 中学寮へのアクセス道がないのではないかと 陶芸教室に触れているのではないかと（これらは新しく図面を描く段階で対応をすることができる見込みである）。
2. 高校棟を新築し、一号館、二号館の改修で対応できるかどうかについて 二号館とは渡り廊下で接続すると、（渡り廊下が全くの仮設である場合を除き）接続建物には新建築基準法での耐震基準が適用され、したがって、耐震補強工事が必要になる。その結果、一号館にも同様。改修の場合も、改修の程度によっては、新建築基準法での耐震基準が適用される。

④ 附設校として今後準備すべきこと

対法人説明用

1. 近日中に、中学15学級・高校15学級相当の建設案の図面を示すので、それをもとに細部を修正し、現実性の高い案を作りあげる。
2. 計画案実現の際の経常費の経営的改善点を確認する。
3. 教職員増を確認する。
4. 並行して、現行の募集体制下での時間割のシミュレーションを行なう。
5. これらによって洗い出される不足分の対

策を練る。

中期的検討（対私学振興課用）

1. 建築期間中の移行措置を検討する。
2. 高校募集停止以後の6年一貫教育のカリキュラムを練る。
3. 中学共学化対応の講習会等の検討準備を明らかにする。

この文書中の① 2 (h)項で言及した図面に基づく校舎のイメージを示しておこう（3階建てであることに注意）。



改訂校舎案イメージ図
佐々木郁夫氏（附設アーキテツツ21）の作品

4.

ここで、校舎計画そのものを、振り返っておきたい。

新校舎計画の基本は、当時の老朽化した野中校舎を新時代対応の教育環境整備のために更新することであり、資金計画としては、法人の基金取り崩し及び久留米大学創立80周年・附設高等学校60周年・附設中学校40周年を機会とする募金による寄附金を充当するものであった⁴。

4 詳細は、当時の寄付金募集の趣意書と学校法人の当時の理事会議事録参照のこと。

一方、附設校地は、都市計画道路線がグラウンドのほぼ中央を東西に走っており、また、この計画線と正源寺山との間の校舎群のある一帯は風致地区に指定されていた。これらは野中校地の成立後の指定ではあるが、強い建築制限が伴っており、そのため、旧校舎を残したままの校地内での新校舎建設は無理であった。旧校舎を取り壊して全く新しい校舎を建てる場合でも旧校舎の規模を下回る建物しか許されないことになっていた。実際、当初案の校舎イメージ自体3階建てであったと記憶するが、高さ制限のもとでの新築建造物ということであったのであろう。

計画時点での附設の構造は、中学各学年3学級、高校各学年4学級、合計21学級で、1学級50名を標準としていた。新校舎案では、中学の生徒定員は、男子単学校を維持するために1学年150名とするなど、附設の基本的な定員構造は変えてはいなかった。他方で、近年の生徒たちの体格を反映して、備品類や教室サイズを大幅にした上に、40人学級化による学級数増（高校15学級、中学12学級）と、課題であった女子生徒対応の施設拡充（高校全体で80名程度を想定していたようだが）を組み入れたものであった。

当初図面は、法人の施設課が基本設計の業者入札のための仕様を図示化するために作成したものと考えられるが、上述の制約のもとに、旧校舎の諸機能の拡張を前提にし、在校生や卒業生による新校舎構想も参考にして、建物の総床面積、階数、教室などの面積や数、必要な設備など、諸々の学校設備を配置したものであった。実際、スケジュール上は、2008年度中に基本設計案の決定と施工業者の入札も済ませ、詳細設

計を経て、2009年度中には、新校舎の建築に取り掛かることになっていたはずである。

しかし、先述の通り、5月の法人側の現地調査の後で、この案のままでは、附設らしい教育の実施が《物理的に》困難になることが明らかになってしまった。その後、半年余りの検討を経て、（再録文書1にあるように）学校法人の理事会に計画案の再提出を行い、修正案の承認を得た。

修正案の基本的なアイデアは、校舎新築を見かけ上旧校舎の増改築として捉えなおし、風致地区指定による建築制限の既存建物に対する適用除外を図ることであった。すなわち、旧高校寮、旧補習教室棟を取り壊し、既存建物の旧野中校舎（当時の二号館）の「増築」という体裁で階数を確保して新棟一部を増設し、二号館の機能に移す形で増設部分を校舎として供用した上で、二期工事として、旧二号館部分を取り壊し、残存部分（つまり、新棟）の増築である新校舎の残りの部分を建てることになった。建築期間中の学校としての機能維持のためには不可欠な措置であったが、建築関係については法人の施設課が久留米市と、教育関係についてはわたくし自身が福岡県私学振興課と、綿密な協議を行なった上でのことでもあった。

また、附設高同窓会にも、ここまで大変な肩入れをして来ていただいたこともあり、校舎計画の状況の報告をしておかなければならなかった。時期的に、2008年度の総会には間に合わなかったが、いろいろな機会を利用して、校長としての考え方を含め、方針の説明を行なった⁵。

改訂の要点は、一層の建築面積の絞り出しだけでは留まらず、教員増の強化という恒常的な人件費増が伴うことも含み、学校の経営問題へ

5 サロン・ド・附設 in 福岡における講演（pptファイル）：附設校を巡る状況について（pdf）。付録に示す。

の波及を意識したことである。

さらに、校舎は、一旦完成すると学校の構造を長く決めるものである。例えば、野中の旧校舎は男子単学校として建設されており、そこに少数とは言え、女子生徒を受け入れたものの設備的には万全とはならなかった。附設が、向こう何十年も、男子単学校プラス・アルファのままでいられるとは到底想像できないとすれば、将来の全面的な共学化の際に女子生徒向けに転用できる設備面積も確保しておかなければならないだろう。ただ、共学化をどの時点で行なうかは、経営判断であり、周辺地域、特に、通学圏の人口動態を睨みながら決めればよいことだが、新校舎が後世の選択肢を狭めないことが重要だと、わたくしは当時考えたのである。

5.

さて、校舎計画は、再録文書1の後、実際はどう推移したか。

学年末の職員会議での報告を、当時の附設の課題を見るために、校舎関係以外のものも含めて、再録する。

(再録文書3)

職員会議連絡報告事項 (平成21年3月13日)

校長

1. 校舎建築案とそれに伴う学校行事について

- ① さる2月27日開催の学校法人久留米大学第749回理事会において、協議事項1として、「附設高中校の建築計画について」の審議が行なわれ、概略以下の通り承認された。

高校校舎 延べ床面積 5300平米

スケジュール

基本・実施設計

平成21年5月～平成21年11月(7ヶ月)

工事(解体・造成工事等含)

平成22年3月～平成23年7月(17ヶ月)

中学校舎 延べ床面積 4700平米

スケジュール

設計

平成23年1月～平成23年4月(4ヶ月)

工事(解体・1号館改修含)

平成23年9月～平成25年3月(19ヶ月)

- ② 中学校舎設計の前提は、将来計画、主に、中学校の増員を含む構想の確定である。平成21年度内の確定を目指す。要点は40人学級実現のための教員増の保証である。
- ③ 一方、平成21年度後期より、建築関連の環境の変化が校内に影響を及ぼし始める。特に、学校行事の整理を図り、工事期間中の事故の可能性をできるだけ小さくしなければならない。中高の行事一体化は喫緊の要請である。
- ④ なお、中学卒業式については、久留米大学長及祝辞及び学校法人理事長の祝辞を来年度より省いてもよいのではないかと。

2. 嘱託講師について

- ① 現行の久留米大学の学則では、久留米大学附設高等学校・中学校に定められている「嘱託講師」は定年退職後の元教諭に対して適用されるものであるが、新任の教諭の採用について定めたものではない。
- ② これまでの「嘱託講師」名目での新人採用は、久留米大学人事規定上は教諭としての採用であった。これについて人事規則の改定を検討しているが、労働協約に関わることであり、簡単に条項を定められる状態ではなく、いずれにせよ、今年度の「嘱託講師」には遡及できる形のものではない。
- ③ 以上の事情にもかかわらず、従前、新人は「嘱託講師」として原則2年間の業務見習い

を課されてきた。小生の赴任前のことであるが、この際の研修プログラムがきちんと設計されていたとは言えない状況であったようである。今年度は、試行に近い要素はあったものの21回の新人研修が行なわれた。今後次々と教員の入れ替わりが予想されることを考慮すると、研修の実施は重要かつ不可欠なことである。今年度の研修は、まだ、研究授業の実施を欠いているなど改善の余地はあるものの、大いに評価に値する。この点を踏まえ、また、上述の事情を考慮して、今年度の「嘱託講師」6名は来年度より「教諭」として発令する。ただし、研究授業の実施を前後期に各1回ずつ期待しており、関係の先生方のご配慮を宜しく願いたい。

- ④ 今後、新人については1年間の体系的な研修と教科の研究授業を課した上で、2年目から「教諭」発令、3年目には学級担任も可能になるような育成プログラムを想定したい。

3. 来年度の運営体制について

- ① 前回の職員会議でも述べたことであり、確認事項である。

来年度は、運営委員会を月1回、原則として、職員会議の前の週に開催する。

運営委員会の構成は、従前の言葉で言えば、拡大運営委員会のものであって、校長、事務室長、両教頭、総務、教務、進路指導、生徒指導の各部長、寮監長、図書館長ならびに各学年主任の計16名である。

変更の主たる理由は、今年度、学年によって各部の審議内容を運営委員会で整理したことが全く伝わっていなかった例が見られたことである。また、異なる学年間で共通あるいは類似の課題に遭遇している事例もあるようであるが、これらについての情報交換の場を

設けるほか、学校全体で早期に課題に対処する道を拓くためである。

委員の欠席は想定しないものとする（日程調整を図る。例えば、運営委員会は第二水曜あるいは木曜の放課後の1時間程度とする。やむを得ない場合を除いて、代理による出席は避けていただきたい）。

- ② 中学校舎設計の前提ともなる「将来計画案」の策定については、本校の全員に関わることはあるが、基礎的な調査検討を要する。検討項目をある程度絞り込んでおいてから、改めて、具体的な作業やそのための組織の構成について相談したい。

6.

ここまでは、附設の新校舎計画が、2008年度中に有為転変はあったけれど、ようやく軌道に乗ったという話である。この後、校内に（改めて）「建設委員会」を設け、学校法人と連携しつつ、新校舎建築に向けて走り出した。

基本設計を担当する建築事務所は、コンペ（簡易プロポーザル）を経て、2009年5月に、教育施設研究所が選任され、ほぼ10ヶ月掛けた基本設計に基づく入札では、建設工事に関わる三社、戸田建設、東光電気工事、朝日工業社が落札した。この辺の経緯は、上掲拙著に概略を書いたので省略する。今から思えば、校長のわたくしは気楽なものであったが、当時の附設の事務室の人々、教員諸氏を含めて、関係者のご苦労は大変なものであったろう。なかでも、教育施設研究所の担当者清松信氏、そして、戸田建設の当時の社長、井上舜三氏（8回生）には、改めて（当時の附設の代表者であった者としての）謝意を呈したい。

校内に向けての、新校舎計画の説明を2010年

3月6日に行っている（「新校舎の建築について」pptファイル。そのpdf出力を文末に付録として付しておく）。

新校舎の設計、建築、そして、完成、供用に至るまでには、若干経過は異なったが、最終的には上掲の再録文書3に示された時点での供用開始ができた。建築期間中、2011年3月11日に、東日本大震災が発生した。建築資材の調達面で、この影響は大きく、中学棟建築の質にも影響は及んだ⁶。一方で、高校棟建築中に、工事事務所への放火があり、寮生の緊急避難という事件もあった。

実際に、中学棟まで込めて新校舎が一応完成したのは、2012年秋、そして、中学共学化初年度の入学生を迎え入れたのは、2013年4月であった。このときの入学式での校長式辞は、上掲の拙著（pp.183-186）に再録してあるが、共学化のことには淡々と触れているだけである。

7.

校舎新改築工事において重要な出来事が三つあった。

- 第一 新高校棟増設工事のために、旧設備、すなわち、旧高校寮と旧補習教室棟の解体、
- 第二 新高校棟の完成後に、二号館（旧校舎）全施設および一号館の職員室、美術教室などの新高校棟への一時移転、
- 第三 二号館の解体であった。

第一については、建物内部を小型の重機が走り回っているのを眺めながら、建築関連の技術

の進化に驚いたが、今から、15年ほどの昔の話である。今ならば、もっと進化した技術が使われるのだろう。

第二については、50人学級体制下を維持しつつの、あくまでも二年程度の暫定的なものとして、建設計画のうちに読み込んでの周到的準備のもとで、実行された。生徒諸君には少なからぬ不便はあったはずだが、経験にもなったと思われる。

第三については、こんな文章が残っている（2011年10月6日）。当時は二学期制で、前期と後期の間に、短い秋休みがあった。この間に、二号館校舎から、完成したばかりの新高校棟に諸設備を移転することが予定されていた。

（再録文書4）

さて、今日が、皆さんが二号館と付き合える最後の日で、秋休みが終わって戻ってくると、工事用の板で囲まれているはずですよ。

今は、まだ、万事が変化の時期で、皆さんは何というか忙しさにかまけて何も感じられないところではないでしょうか。いや、そこそこの儀式はできます。儀式というのはそういうものです。

で、新しい校舎ですが、新しい校舎にも今の校舎を思い起こすような仕掛けは施してあります。それはまだ見えてきません。一方、ここで皆さんがいろいろなことをする、垂れ幕やらクラッカーやら。でも、そういうことの本当の意味は、皆さんが卒業して何年か経って、学校を訪ねたときに、何かのきっかけが働いて、思わず涙をこぼすようなことがあるときに、初めて分かるのではないかと思います。

6 具体的には、高校棟建築の時は、工事進行に伴う微調整ができたが、中学棟建築時にはそれが叶わなかった。なお、熊本地震は、新校舎完成後の2016年4月であったが、中学棟と高校棟の接合部に、軽微とは言え、影響が出た。

つまりは、今は、このお別れ会も、まあ、ネタのようなノリで行くはずです。だが、何年か経つと……。ところが、例えば、十年経ってから来て御覧なさい。古い校舎はもうなく、新しい校舎は、まわりの環境に溶け込んでいて、大きな顔をしているだろうと思います。それでも、校門を入ると花みずきの並木の向うに板垣先生像のある植え込みが望まれ、そうして、かつての階段室の塔を思わせる塔が見え、タイムスリップを覚えるかも知れません。

皆さんが、この学校で過ごす年齢の時期は特別なときです。みなさんはものすごい勢いで変わっていきます。建物はゆっくりと変わって行きます。そして、ときどき脱皮します。一回り大きく美しくなるために脱皮します。

これから一瞬の間だけですが、脱ぎ捨てられた皮になってしまう、今の校舎が最後の輝きを見せるとき、皆さんは、こういう大事なときに立ち会えるのです。古い校舎にありがとうと言い、新しい校舎は大事に使わせていただくぞ！と誓いましょう。

これは一種の儀式で、生徒や教職員全員が、板垣先生の胸像の周辺や、二号館の窓辺に集まって、何枚かの写真に収まった記憶がある。どこかにあるはずだが、見つからない。記念誌委員会はお持ちだろう。

ところで、再録文書4の末尾の数段落だが、実際に、数日後、解体に立ち会っていて、二号館が野中校地の新校舎として立ち上がった当時の姿が一瞬だが立ち現れ、同時に、原巳冬先生の周到的配慮が衝撃となって伝わってきた。われながら、なぜ、この数段落を書き込むことが

できたのだろうと思う。

わたくし自身、いくつかの古い建物、北海道大学理学部本館、同古河講堂、あるいは、箱崎の九州大学工学部本館、(取り壊されてしまったが)同旧応用力学研究所の建物(=かつての九州帝国大学法文学部の建物)などの一室に研究室を宛てがわれていた時期があり、これらの建物の当初の名残や改修の跡も目の当たりにして来たから、確かに建物も生き物だという実感はある。附設の旧二号館も建物として実に立派な一生をおくることができた。

二号館の解体の様子を眺めながら、つくづくと感じたのは、新校舎はどんな一生をおくるだろうか。どんな一生をおくらせて貰えるだろうか、ということであった。

(文責：第十代校長 吉川 敦⁷⁾)

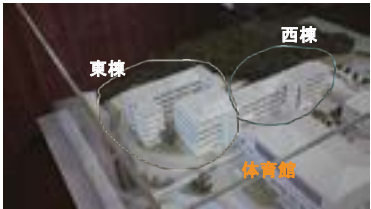
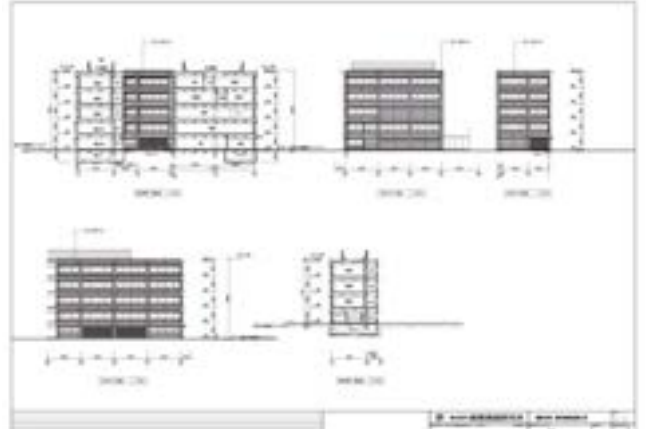
(付録)

1. 新校舎の建築について 校内向け資料 (ppt) pdf (平成22年3月6日)
2. 附設の方向性について(問題提起) (ppt) pdf (平成20年8月19日)
3. 附設校を巡る状況について (ppt) pdf (平成20年10月10日)

7 第十代校長(久留米大学附設高等学校・中学校名誉校長 2017)。前職は、九州大学大学院数理学研究院教授(名誉教授 2007)。理学博士(東京大学1971)。瑞宝中綬章(2023秋)。

(付録)

1. 新校舎の建築について 校内向け資料 (ppt) pdf (平成22年3月6日)

1 新校舎の建築について 校長 吉川 敦 (平成22年3月6日)	2 久留米大学附設中学校・高等学校の校舎新改築計画 久留米大学80周年(1928－2008)の行事の一環 久留米大学附設高等学校60周年(1950－2010) 久留米大学附設中学校40周年(1969－2009) このような機会に、旧高校・中学寮、現二号館を取壊し、 新校舎の建築を行なう計画である。 ようやく、工事計画の概要がほぼまとまったので、生徒諸君に説明し、 併せて、工事期間中の安全配慮のための注意を喚起したい。
3 新建物の配置図 	4 
5  校舎模型 8月後半の図面に基づいたもの  背景は校長室の棚に積みあがっている書籍類 校門側から	6 断面図(主に東棟) 

7

工事は二期に分けて行なわれます。

0. 旧高校・中学寮解体、造成工事(本年5月初～9月 末)

1. 第一期工事(本年9月～来年7月:11ヶ月)
東棟(高校校舎)建築工事

この後、二号館部分(高校・中学他)＋図書館他は新造の東棟 に
仮移転する(来年8月)。

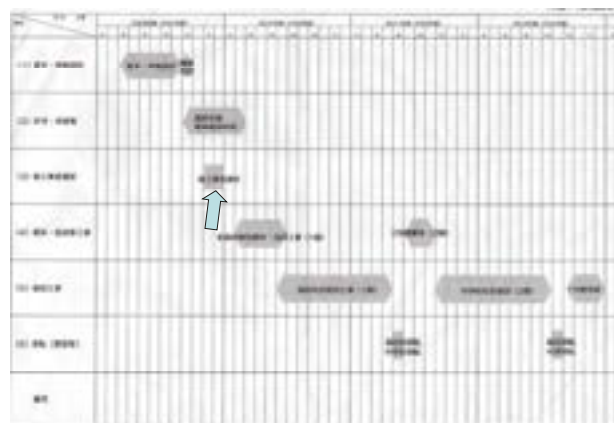
2. 第二期工事(来年9月～再来年10月)
二号館解体工事(来年9月～来年10月)
西棟(中学校舎)新築工事(来年11月～再来年10月: 11ヶ月)

この後、高校、中学部分は、それぞれの教室に移転。

さらに、平成25(2013)年4月から、すべて新校舎で！

8

工程の概要



9

新校舎は一回の呪文で瞬時に出現するわけではない。

当然、工事期間の安全確保や、さまざまな障害回避の努力が要る。
来週中には施工業者の決定がなされるはずであり、附設中・高等学校、
設計監理事務所、施工業者と、このための具体的な協議が始まる。

皆さんに是非とも守ってほしい安全上の行動規範は機会を 改めて
説明する。

平成25年度以降の新校舎においては、現行と大きく異なるのは、
年次進行で、40人学級を実現していくことである。
学級数の増を伴うことであり、具体的な編成方針は、現在審議中である。

以下で、新校舎の教室配置や主な構造を見せるが、完成形として、
この形での運用が実際に行なえるようになるのは、平成25年度より
一般には遅れると思うてください。

10

以下のスライドで、新校舎の図面を見せる。
必要に応じて、pdf版も見せることができる。 pdf版は、局部の拡大も
可能であり、必要に応じて、拡大図をお見せしたい。

大体の位置関係: 東棟 現体育館の南側 1階～5階
西棟 現二号館 (の3分の2くらい) 2階～5階

主たる生徒出入り口: 東棟3階部分 体育館の2階部分と同レベルから
さらに階段で上る

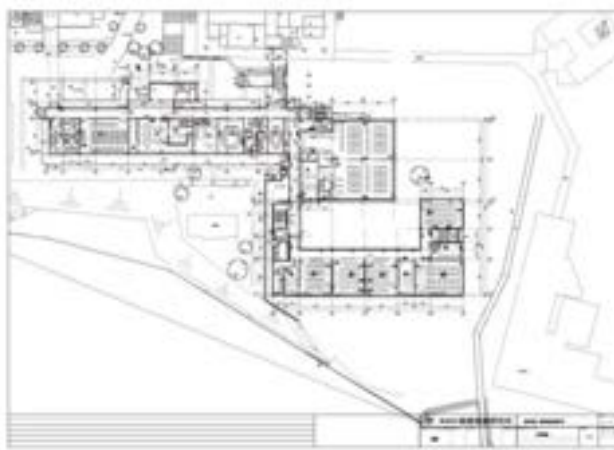
11

1階平面図(東棟のみ)



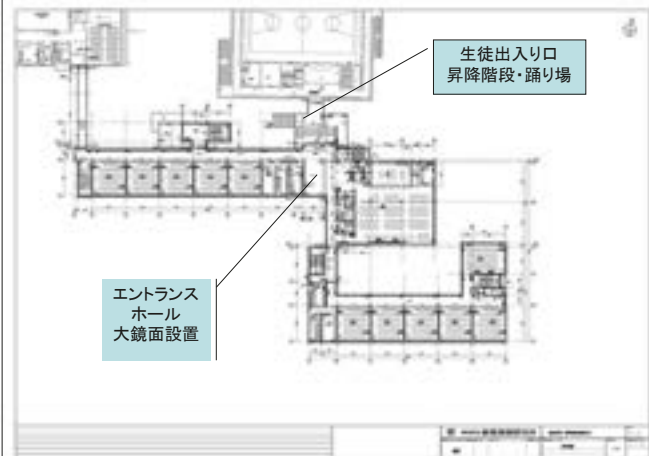
12

2階平面図



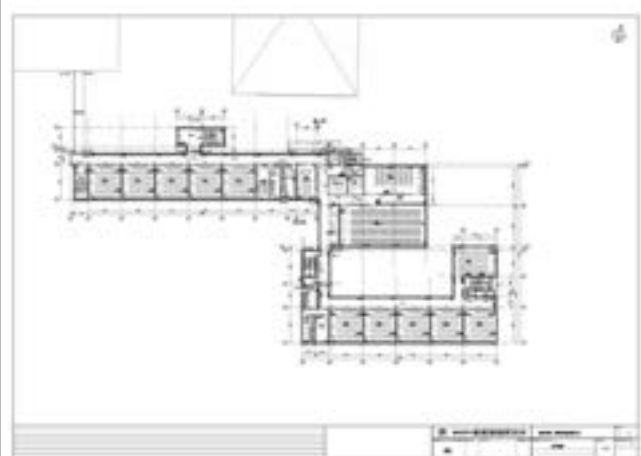
13

3階平面図



14

4階平面図



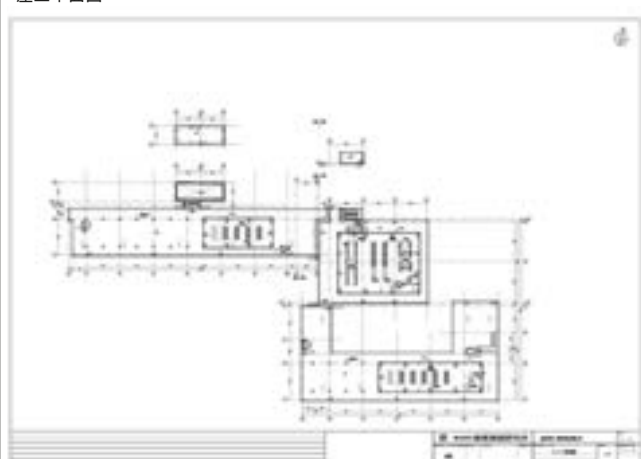
15

5階平面図



16

屋上平面図



17



西棟階段室北面
(設置予定)
ステンドグラス

文化功労者
野見山暁治画伯
(58回生卒業記念品)
「初めての日」

18

新校舎のための建築条件について

1. 現校地には、都市計画道路の設定がある！
グラウンドのほぼ中央に。
当面実現の可能性はないとのことではあるが、指定は基本的に
国レベル。当然、解除も国レベル。
2. 計画道路より南側と正源寺までの区域は、風致地区である。
この意味は、建築制限が非常にきついということである。
計画案は「既得権」を含めても、許容範囲の上限まで利用して
いる。
3. 最後は、言わずもがなの経費的な問題であるが、これは、
まだ、今後の努力の余地もある。ただ、建築計画が当初アナウンス
されていたよりも遅れた理由の一つにはこの問題があったとは
言ってもいいだろう。

19

新校舎を美しく保つために、今から心掛けてほしいこと

1. 新校舎では今まで同様基本的に**下足**で出入りする。**泥落としの励行を、今から、一層強化してほしい。**
2. 新校舎の清掃は「**教育上の配慮もあって**」今と同様、生徒諸君に抛るところが大きい。
また、掃除の話か、と思わずに、
今から真剣に、上手に清掃をするにはどうすべきか、
ゴミを散らかさないようにするには何に注意すべきか、よくよく
考えて、適切な提案を学校(つまり、校長や諸先生)にして、
かつ、それらに基づいて、校内を美しく保つための行動を実践して
ほしい。
3. 建築期間中、安全面の配慮もあって、**学校行事の簡素化**が
進行する。一部は、新校舎が完成した後も維持されるだろう。
この点についても、柔軟な対応を期待している。

20

新しい校舎は、すなわち、新しい学校の出発である。

学校が新しくなるというのは、決して校舎だけのことではないが、校舎の新築は重要な契機であることは、附設の歴史でも明らかだ。

だが、新しい学校とは、過去を否定することではなく、そのエッセンスをさらに伸ばして行くことだ。

そして、そういう新しい学校が生まれる過程に立ち会う君たちは、継承すべきエッセンスを具現化している存在であるはずだ。

工事期間中には、いろいろなトラブルが、残念ながら、起こりえる。
しかし、不用意な行動、軽率な振る舞い、そういったものによるトラブルはできるだけ少なくしたい。君たちの協同を期待する所以である。

21

工事の詳細は、施工業者の選定が終わってからである。

工事に伴って、**さまざまな儀式**がある。

二号館の校舎で学んだ先輩は数多い。特に、二号館が新築された最初の学年の人たちもいる。本校の教員の中にもいる！誰だ？旧高校寮で青春の一時を過ごした人たちもいる。

これら旧建物の解体にあたっては、これらの建物への感謝を表す行事を考えたい。

そして、新しい建物の建築に当たっては、また、別な儀式が要る。

これらの儀式への生徒諸君の関わり方についても考えている。

22

本日の説明は、以上である。

実際に、工事の詳細を取り決めるに当たっては、

1. **安全な学校生活がおくれるように**
 2. **勉強上の障害が最小になるように**
- 配慮する。

実人生とは、さまざまな障害を乗り越えていく過程であるとも言えるとすれば、工事に伴う(管理された)障害は、君たちのいい経験になってほしいと思う。

2. 附設の方向性について（問題提起）(ppt) pdf （平成20年8月19日）

1 附設の方向性について （問題提起） 学校長 吉川 敦 平成20年8月19日	2 これは平成20年7月度職員会議で述べた感想の続きである。 一方、校舎の新改築計画があり、取り敢えずは、「一時休止」にしてあるが、すでに走り出している計画でもあり、諸般の事情から、平成22年度からの新校舎供用開始のためには、9月度の法人理事会で、計画案の「再開」を図ることが望ましいと考えられる。 現在の状況では、「附設校の教育上の必然性がある」と説明できる施設・設備の要求については、理事会の法人理事以外の成員から異議は出ないものと考えてよい十分な理由はある。 ただし、本来、このためには、附設校の将来計画、特に、将来の教育体制について、しっかりとした描像を示した上でなければならないことであつたが、十分に緻密かつ論理的な形での附設の将来像の検討が過去に行なわれてきたとは言いがたく、したがって、将来の改装の可能性を踏み込んだ新改築案で対処せざるを得ない。 ハード(建物の構造・構成)とソフト(教育の具体的な編成)とは、しかし、不可分である。最初に、ソフトに関する問題提起に重点を置いて説明し、引き続き、ハードの説明を行ないたい。
3 1. 現在の附設校の法制上の地位について確認しておく： 久留米大学附設中学校・附設高等学校は、併設型中高一貫校である (平成19年度から) 調査時点の関係で附設は文部科学省HPの表から脱落。 中学校:450人(9学級) 高等学校:600人(12学級)	4 中高一貫教育の概要 (3)制度の概要 ② 併設型中学校・併設型高等学校 ア) 学校教育法を改正し、中等教育学校に準じて、同一の設置者が設置する中学校及び高等学校において中高一貫教育を行うことができることを規定している。 イ) 併設型中学校及び併設型高等学校の教育課程の基準は、中学校の学習指導要領及び高等学校の学習指導要領がそれぞれ適用されるが、中等教育学校と同様の教育課程の基準の特例が設けられている。 ウ) 併設型中学校への入学については、設置者の定めるところにより、校長がこれを許可する。この場合、公立の併設型中学校においては、中等教育学校と同様に、学力検査を行わない。また、併設型高等学校においては、当該高等学校に係る併設型中学校の生徒については入学者選抜を行わないこととされている。 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/ikkan/2/gaiyou.htm
5 教育課程の基準の特例： 中等教育学校の教育課程の基準は、基本的には、前期課程は中学校の学習指導要領が、後期課程は高等学校の学習指導要領がそれぞれ準用されるが、中高一貫教育として特色ある教育課程を編成することができるよう、中学校の段階で選択教科をより幅広く導入することができること、前期課程と後期課程の指導内容の一部を入れ替えて指導することができることなどを内容とする教育課程の基準の特例を設けている。	6 注意 — 将来構想関連での、定員変更の可能性について (学校教育法上の認可案件) 中学校定員に関しては、しかるべき手順を踏めば、増員可 高等学校定員に関しては、他校との合併等を除き、増員不可 附設の場合、 中学校定員増は高校定員相当600名まで可(学年200名まで)。 ただし、 増員可の基本的な条件は、教員および設備が相当であることである。 (福岡県私学振興課による)

7

1200名体制までの一応のシミュレーション

中1	中2	中3	高1	高2	高3	備考
150	150	150	200	200	200	現行
200	150	150	200	200	200	中学定員増（学年進行・40人学級も）
200	200	150	200	200	200	
200	200	200	200	200	200	40人学級完成
200	200	200	200	200	200	高校募集停止 学則改訂

8

中学定員増は認可を得なければならない：

手順1 定員増実現予定の前年度に県との協議（5月末まで）

実地調査などが含まれる

手順2 6月に認可申請書を提出する。

県との協議を経ての認可申請書であるが、正式決定ではない

入試要項・受験案内等にはこの時点では記載できない。

塾などへのアナウンスは可。

手順3 福岡県私立学校審議会の審議を経て、正式認可（7月中旬）

備考： 附設の場合、高校での共学化があり、定員増段階で中学の共学化も当然視される

9

新校舎案との関係：

後に説明する新校舎案は現行定員を前提として描かれている。

難点： 床面積がすでに大きい。
経費を「現在の附設校」に即した論理では賄えない

対策： 現行計画案の縮小—将来の展望に目をつぶる
または、
現行計画案の拡大—「現在の附設校」を超えた論理を示す。

最終的には、学校法人久留米大学の法人としての判断に帰着する。

方針： 附設校の強化拡充という法人としての経営判断を誘導する。
そのための材料として、
ア) 1200人体制の実現、
イ) 九州新幹線の開通による通学圏の拡大
...

10

中学150人増 ==> 教員を増員する自前の資源が得られる

ただし、検討課題は多々ある。

1. 共学化の問題
2. カリキュラム・シラバスの整備

11

2. 本校の方向性について(本題)

課題1： 本校の生徒の学校への帰属感を高めること

課題2： 附設の価値観ともいべきものの重層度を高めるべきこと

3. 附設校を巡る状況について (ppt) pdf (平成20年10月10日)

附設校を巡る状況について 赴任6ヶ月のご報告

サロン・ド・附設 in 福岡
平成20年10月10日

久留米大学附設中・高等学校長
吉 川 敦

2

この4月に縁あって久留米大学附設中・高等学校の校長に赴任しました。

赴任してわかったことは、校長の人物の重要さであって、
校長に要求される総合的人格、つまり、
教養、見識、判断力、構想力の質が、
学校を維持し、発展させていく上で **crucial** であることを
痛感しております。

人格の涵養では今更もう間に合わないと思いつつも、
全力投球を心掛けております。
宜しくお願い申し上げます。

3

久留米大学附設中・高等学校についての概略

併設型中高一貫校

主たるライバル校

本校の卒業生の進路

(制度的追認・平成19年度より)

鹿児島ラサール中学・高等学校
ただし：規模は本校が若干小さい

高度専門職業(医師・研究者等)に集中

本校の影響力は社会的には限定的である

このことをどう考えるか 本校の今後にも直結している

4

そこで、

本校の当面の課題は何か

地方の進学校が抱えている問題は、今日の社会情勢下では、基本において似た点も多いと思うが、各校特有の困難もある。

本校の場合：建物計画？

建物の供用期間

少なくとも 四半世紀(25年)

建物計画の前提：少なくとも四半世紀を見通した将来構想

5

建物計画の前提は将来構想だけではない。
将来構想と言っても25年はいかに長い

だが、現在の附設校の主な建物は原校長以来である
附設中を始め、現在の附設の基礎をなした**堅牢な制度設計**が随伴している

40年しっかりと機能してきたではないか！

いかに堅牢周到な当初の制度設計のもとでも40年の経過時間の間にさすがに疲労が溜まってきた

確かに、いろいろと手直しを行なうべき頃合ではある。

建物計画には、附設を新しく再設計するくらいの**気構え**が欠かせない！

まず、海図の回復を行ないたい

6

学校は何を「売る」べきか（一般論）

対内的

対外的

知育・徳育・体育

“教育”(学習と生活の指導)

短期的

中期的

長期的

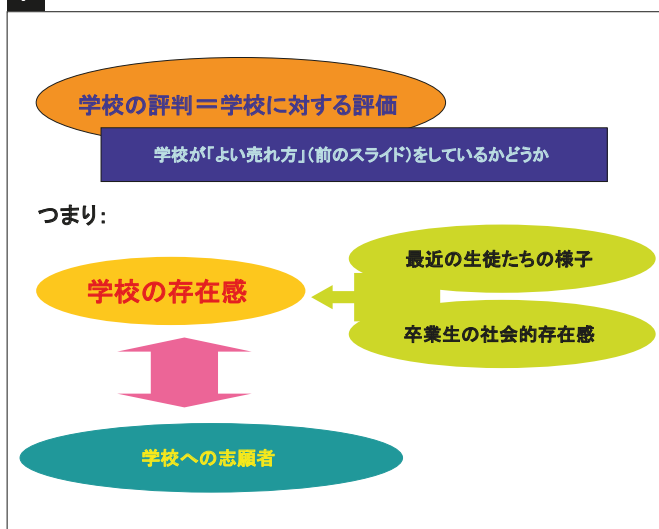
生徒の“姿勢・態度”

“進学”実績

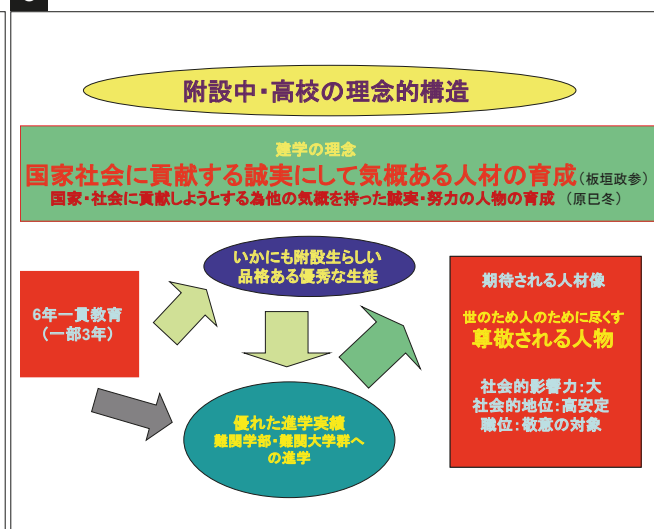
卒業生の社会的“位置”

032

7



8



9

教育方針 附設中学・高等学校(教育のねがい)

(学校案内所収)

1. 国法を基本として教育を行い、ひとの世の幸せと喜びのために力を尽くすことを人生の真理とする、誠実にして志気旺盛な人物を育成したい。
2. 全人教育を基調とし、生徒の個性・能力を尊重して、自主性・創造性を培い、特にその人生に大きな意義を持つ青年期における志望の確立に力をつくしたい。
3. 師弟・学友、共に学び、謙虚で向学心篤く、大学において、更に将来に亘って大いに学びうる人格の基礎を培いたい。
4. 共に生きる人びとと互いに協調して、労苦を共にしうる、豊かな心情、関連な気性を育てたい。
5. 柔軟でしかも強靱な体力をもち、環境の変化にも幅広い適応力をもつ健康体を鍛え上げたい。

中学創設時に、さらに、7項目掲げられている:

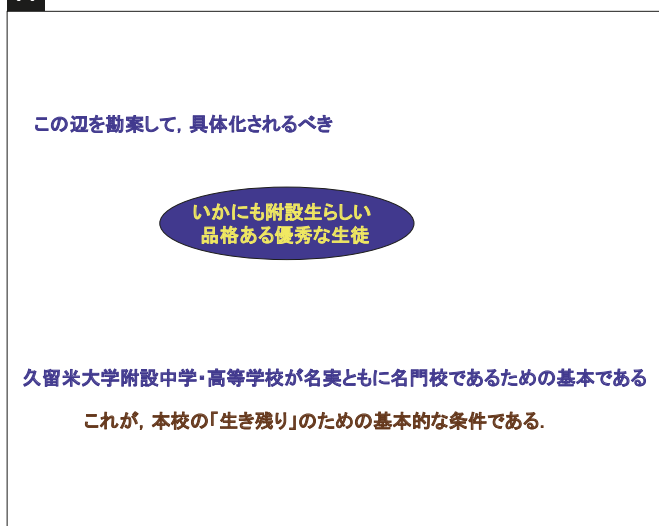
10

附設中学校教育方針(昭和44年開校時) — 歴史的興味

6. 全人教育を目標とし、すぐれた教育環境のもとで、精神衛生にも留意して、指導を行い、正しい学習態度を身につけさせ、自覚性・合理性を高め、学力の向上と健康体の育成に努める。こうして生徒の可能性を開発し、個性豊かで、気概と気品をもつ向学心旺盛な中学生を育てる。
7. 小定員学校の特色を活かして、学習指導、生活指導を徹底して、生徒一人一人の可能性を充分伸ばすことに努める。
8. 中高一貫教育を自在に実現して、生徒の発達に即した六か年の教育課程により、教育効果の向上を期する。
9. 大学進学希望の男子のみの学校として、その志望に応じた適切な教育を行う。
10. 発達段階に即した教材配当と指導とによって、学習意欲を高め、好学の心情態度を確立する一方、基礎的教育を重視して、諸実験やLLの様な教育機器の活用につとめ、可能な範囲内で、基礎教科の時間数を増加する。
11. 特別教育活動は人間形成の場として重視し、体育クラブは全員参加として、本校体育教育の本旨に立って生徒個々の体位の向上に資する。
12. 大学進学は以上の様な努力の結果として、自然に各生徒が自己の適性と志望によって自由に大学を選択しその進路に進みうる力量の育成に連なることになる。

(久留米大学五十年史・第五編附属学校史第二章第二節、520-521頁)

11



12

建物計画の前提 :

正しい(冷静な)現状認識

環境の変化

社会構造の転換

趨勢としての少子化(地域・全国)
趨勢としての国力の低下(全国)

競争条件の悪化

早稲田佐賀中・高校の衝撃(地域・福岡都市圏)
新幹線開通と九州の一体化(地域・北九州鹿児島間)

附設の現状

若干の混乱

中学受験生の減少(附設人気の陰り?)
高校合格者の流出(高校入試に伴うコスト?)
学校評価運営研鑽システムの欠如(海図の非存在)

対策としての建物計画

上掲の諸点を踏まえ、少なくとも四半世紀を見通した将来構想に基づくものに強化するための作業中である(10月10日時点)

13

当初の建物計画はどうなったか？

経緯：平成17年4月：附設中・高校長から提案(4月5日付文書)

趣旨：久留米大学80周年事業

平成17年9月：80周年記念事業小委員会承認。

平成18年2月：学校法人久留米大学理事会決定

概容：4階建て、渡り廊下を含む約6900㎡

事業費の支払い年度(2007-2010年度)

基本理念：建物の更新整備・40人学級化

平成19年度 附設校内の建設委員会で具体案検討

平成20年3月：久留米大学財務部施設課へ図面(約9400㎡)手交。

以来、事業開始の遅れ・経費問題・図面変更など

平成20年6月：予備品予備調査で明らかになったこと：

建築案が附設における教育の実態を反映していない

学級数の増加による教育環境と条件変化への対応不足

さらに、周辺の社会的変化の読み込み不足

平成20年6月：学校法人久留米大学理事会

再提案準備のための計画中断を要望。

14

平成20年8月：学級増に伴う実験室増・図書館面積増などを読み込んだ再提案図面を法人に提示。

その後 事業費の大幅増対策として、改めて、さらに踏み込んで、建築理念を改めて、現在、法人と協議交渉中である。

建築理念 = 将来構想 に伴う建物

現状は、まだ、詳細をお話できる段階ではないが、法人側との協議で将来構想に関連して、今まで表に出なかった方向性の可能性も指摘されたことは言える。これに対する本校としての対応は検討中である。

建物についての一応の今後の見通し：比較的順調に推移すれば、

2009(平成21)年8月 実施設計完了

2010(平成22)年1月 諸手続き完了

2011(平成23)年5月 第一期工事完了

2011(平成23)年6月 現2号館取壊し着手

2012(平成24)年9月 第二期工事完了

正直に申上げると、現段階では全く目処が立たない状態である。

15

将来構想というけれど

附設の最大の問題：「将来構想」および「現状分析」の習慣が失われて久しい

「将来構想」および「現状分析」の形跡は平成に入ってからは見られないようである。

将来構想の前提（既述の「建物計画の前提」と重なる）

附設の教育理念の確認

教育理念達成についての正確な現状把握

同上の原因分析と評価

環境の変化についての評価

地域との連携

以上を踏まえての教育理念および教育方針の確認あるいは改訂提案

将来構想：学校の今後の形についての提案

16

実は

附設赴任後、一箇月余りで、附設の 中・長期的な課題 が見えたように感じた：

以前のスライド(建物計画の前提)で

附設の現状

若干の混乱

として現在の附設の直面する困難を指摘したが、その背景は何か？

「将来構想」および「現状分析」の習慣が失われていること。したがって、「現在」を知る手立てを欠いていること。

17

課題とは、附設というシステムの抱える構造的課題の解決を図ることである。

小生の任期：2008(平成20)年～2010(平成22)年

再任の場合：2011(平成23)年～2013(平成25)年

任期の間(3年ないし6年)のほとんどすべてが建物計画の実施に充てられることになるが、それだけでは、上の課題への取り組みにならない。

「将来構想」「現状分析」を行なう「眺望委員会」(Steering Committee)を正しく定義して、導入することが不可欠である。

なお、建物計画自体が学校新設ではないために、通常の教育を保証しながら、進行させなければならない。

このためには、現状では不十分ながら、多少とも将来のありかたに踏み込んで建築計画を改定していかなければならない。

18

建物計画改訂の与件：

1. 先ほど示した「当初の建物計画」のために用意された基金は、もともと久留米大学80周年記念事業のためのものである。

昨今の金融情勢はもとより、先行きが読みにくい状況のため、大幅な増額は一層困難になっているかもしれない。

2. 対社会的には、高校で男女共学が行なわれており、今後の組織変更はどんな形であれ、共学を前提にしなければならない。

3. 生徒の状況についても、特に、質の確保に関して、早稲田佐賀中・高のこともあり、非常に見通しにくい。少子化の趨勢の中で、長期的に、生徒の質を維持するにはどうしたらいいか、「ゆとり教育」下でもあり、非常にみにくい。この辺りは手探りになる。

一方、建物計画を建物の耐用期限まで先送りすることも考えられるが、その場合、環境の変化を考えると、附設を巡る混乱を加速させるだけであろう。つまり、それはできない相談である。

19

法人との協議の結果、選択肢は限られていることはわかった。
新たに法人側から示唆されたのは、校内および同窓会幹部に説明し相談してきたものとは異なるものを、有力な選択肢に加えることである。
ただし、それについての小生自身の検討も済んでいない段階である。

校内日程： 10月15日22日 「運営委員会」
10月23日 「職員会議」

これらは具体的な教育カリキュラムのシミュレーションのために不可欠な手続きである

学内日程： 10月24日 「理事会」

本件は関わらない。

11月の理事会で「附設校将来計画」(附設側提案)の承認を間に合わせるためには、10月中旬に関係各方面との協議調整ならびに法人との再調整を済ませなければならぬ(月末には「修学旅行」が予定されており、10月28日がデッドラインである)。
「建物計画」はこれを経て12月の理事会での承認を目指す。

20

付記：

平成22年度早稲田佐賀中・高校の開校は、福岡市内の私立校の状況を一変させつつある。

県立高校が対応を早くからしていたことは聞いてはいたが、早稲田開校に合わせ、私立男子校が共学化する、中学を併設する、建物を新築するなど言わば迎え撃つ準備をしているという(具体名省略)。

附設の取り組みは、はなはだ遅れており、多くの方々から、お宅は、医学部と東大だから心配していないのじゃないと言われたが、そういう面もあったかも知れない。内実は、附設の視野というか眺望力の問題であつたろう。

そして、これも附設というシステムの抱える構造的課題の一端と思う。

21

小生自身は、学校の将来を考える上で、附設が医学部と東大に意識の上で特化していることに強い危機感を覚えている。もとより、これは確かな現実であり、学校がこの現実依存していることは間違いないことではある。しかし、このままの状態を無策のまま継続させることは、学校としての附設の存在感を高めていく(つまり、附設が希求しているはずの、誠実な努力を重ねて社会に貢献しようとする気概に富んだ人材の養成)上での障害になりかねないと心配している。

今回、附設校の建築計画や将来計画を再構築するにあたって、主に、お世話になった方々は、実に、多様な大学の多様な学部のご出身の方々であった。
母校のために、貴重な時間をお割きいただき、小生のさまざまな相談や問い合わせにお答えいただいた。まだ、進行中の件とは言いながら、心より感謝申上げる。

22

ご質問があればどうぞ！

ご清聴ありがとうございました。

(完)